

# 研究会通報

16. 95  
1974年12月刊  
村落社会研究会局  
事務局  
東京農工大学一般教  
育部社会学研究室  
東京・府中市幸町  
(3-5-8)

## 村落社会研究会

### 第二二回大会報告

#### △ 第二二回大会について

第二二回大会は宮城県蔵王町遠刈田温泉で一〇月一二、一三の両日開催されました。九十数名という最近では最多数の参加者があり、蔵王へのエクスカーションを含め盛会でした。大会についての印象記を愛知大学阪井達朗、茨城大学東敏雄の両会員からよせられましたので御紹介いたします。

#### △ 第二二回大会に参加して

阪井達朗

大会は第一日(十月十二日)に五つの自由報告と二つの課題報告、翌日は一つの課題報告、質疑応答、共同討論及び開催校の御配慮のエクスカーションにあてられた。

本年は共通課題に「日本資本主義と家」をかけての第一年目である。このところ村研は、ムラの内部構造、ムラの解体、都市とムラの関連と考えを進めてきている。こうした中から、ムラを構成する単位である家がどのような要因で成立しているか、また家とムラとはどのように関係し合っているか、そうしてこの両者は、日本社会の全体的変化の中でどのように変っていくか、と云う問題が浮び上ってくる。こうした諸問題を一言で表現したのが、「日本資本主義と家」であった。

かつて発会式が開かれて以来、村研の「あるさと」と言われてきた東北地方——宮城県白石市外遠刈田温泉——での今年の大会である。新参会員であるから勿論説明した「農民の家」も「鳴子温泉」も経験があるわけではない。ただ毎年のように先輩会員によつてくれり返される、発足期の村研のユニークな雰囲気の思い出話いや、わずかに自分も体験している天童大会での記憶が、この地方と村研と

報告でとりあげられた諸事例は、時代的に見ると、日本資本主義の前段階とも言うべき享保期、形成確立期である明治期、及び現段階と、ほぼ三時期に大分することができる。また地域的に見ると、

北海道(釧路支庁標茶町)、東北地方(秋田県大曲及び横手)、関

の結びつきを特別なものと意識させるのである。ましてや先輩諸会員にとって、東北地方での大会には格別の思い出と感慨とがつきまとっていたことであろう。大勢の会員が前夜から集まって翌朝からの研究発表にそなえるのも、例年のことは言いながら、事務当番校と開催校の皆様のご苦心になる会場設営と大会運営の妙にくわえて、こうした背景も今年の大会の一きわの盛り上りにあずかって力があつたかもしれない。

○

東地方（栃木県宇都宮、埼玉県吉見、茨城県瓜連、千葉県東金）、中部地方（山梨県塚川、長野県諏訪、石川県能登、岐阜県飛騨白川）、九州地方（鹿児島県大隈）と広く全国にわたっており、それぞれ熱のこもった発表がなされた。

報告でとりあげられた問題点は次の通りである。日本資本主義の前段階については、甲州における譜代下人の解放、地主制の形成と村落構造の問題。形成確立期については、地租改正に際して地券の名儀がどのように決定されたかを通じて考えられた私的土地位所有権法認の内実の問題。同じく戸籍の除籍簿の徹底的な検討と労働力移動——農閑期における出稼ぎ就業と云う新しい分析視界の導入とをふまえての飛騨白川村の「大家族制度」の意味とその解体に関する考察。日本資本主義の現段階については、農地移動と農業就業構造を低生産地帯、都市近郊兼業地帯、東北型農村の三地域に分類しての比較。農民の賃労働兼業化とともに農民家族の労働力構成の変化——農業危機の一層の進化としての土地持ち労働者化の考察。昭和三十年代後半以降、主として東北地方から都市に集まる出稼ぎ労働の機能と影響の問題。北海道の酪農地帯で農政によって創られた専業上層農家の経営にみられる矛盾の分析。さらに能登半島の社会的性格の異なる三つのムラにおける、家と村落構造の比較の試み。いずれも村落社会における家のもつ複雑多岐の問題点を、それぞれの時代的背景のもとに、さまざまの角度から掘り下げたものである。大会第二日の午後が共同討議にあてられるのも例年の通りである。この一年間に大会準備のために持たれた三回の研究会での論議を基

礎にしながら、大会での報告をめぐって、いくつかの論点にしぼった活発な議論が展開した。その詳細はいずれ年報に掲載されると思われるから、ここでは出された論点に簡単にふれるにとどめておく。

討論はまず現下の農家経済をめぐる問題点から出発し、「古典的な分解とはちがって非常に複雑な要因をもちながら従来とはかなり変わった形態に進んでいる」（研究通信九二号、安孫子会員の報告）と言われる農民家族の存在形態を、生産と扶養の共同組織の統一としての農家がどのように変化しているかに焦点をあてて、その具体的相が、土地所有規模、家族形態、兼業の在り方等から検討された。そこから従来の村落社会にみられなかつた、都市の勤労者の家族に近い性格をもつ農家が生れてきており、それにともなつてムラの構造も変化していることが指摘された。

次にこのような全体的経済状況の下にある農家の社会的性格が、午前中に報告された能登半島にみられる「ツラ制度」（屋敷・家名・耕地の複合体系。これをもつことが一戸たる条件となる）に関連して論じられた。これに関して、他地方における類似の制度についての幾つかの事例が発言されて、一般にムラのなかで一戸の家が承認されるために必要な条件は何かという方向に展開した。

同時にこれは、第三回研究会の討論で出された、家とは何かを改めて問う（研究通信九三号）と云う問題意識につながるものであり、前出の二つの論点を総合した形で今日の、労働力のみでなく土地でもが商品化する状況の下で、ムラと農家がどのように変貌しているかについて、農民の土地觀の変化、大規模農業機械をもつ請負耕

作者の出現、家のもつ消費面と生産面の乖離、直系家族の変質一一  
世代家族化、自作農の家族協業の崩壊等の現象とその意味が論じられた。

○ 結果をあげたと云う印象を与えたのであった。

共同討議はこれらの論点をめぐって、約二時間にわたって行なわれた。司会者の御努力によって、論議が進むにつれて、従来とかく歯車の合いかねる感覚のないではなかつた経済学と社会学との論点が近づきつあるとの感じをうけたのであるが、時間の都合もあつて、残念ながら終了することになった。

勿論この二時間の討議すべての論点が出つくしたわけではない。すでに共同討議の席上で、日本資本主義の労働力市場形成との関連で家をみることの必要性、農業生産に直接は結びつかない家の持つ問題をとりあげる必要性、さらに、かつての家がはたしていた社会的機能と云う側面からのアプローチの必要性等が指摘されている。さらに、司会者の総括においても今後に残された問題点として、

民法改正や農地改革等の戦前戦後の家の変化を考える上で規準となるべきものを正面に出すこと、また生産の単位としての家と家産としての家とが、生産力の各発展段階でどのように関わり合つてゐるかを問題にすること、さらに研究対象の年代についても、中間項としてファンズム期における家の問題をとりあげることの必要性などをあげられたのである。

これらの点を問題として後に残しながらも、本大会は力のこもつた諸報告と、普段よりも歯車の噛み合いの良い討論とで、問題を解決したとは言えぬまでも、問題点の所在を明確にする上で大きな成

#### ○

大会の全日程が終了した後、なお事務局にお願いして一泊させていただいた。合宿は先輩会員八名であった。学会終了後のホフとした気持の中で夕食後にもたれた団欒の一時は、これまた昼間の報告に劣らぬ滋味深いものであった。いまその内のいくつかの話題を御紹介すると、例えば中野・原会員が終戦直後の隱岐島の調査でされた興味深い体験とそれを通じて考えられたムラの性格。柿崎会員が昼間の報告でふれられなかつた白川村調査での苦心談。黒崎会員の留壽都での経験。さらには、すぐれた調査報告には必ず一種の「土のにおい」がするものであると云う、まるで歌人の名人芸のような判断など。いずれも研究報告の場では出てきにくい話題であり、かつそのまま聞き流してしまうにはもったいない価値の高い雑談であった。

大会での報告からうけた種々の啓発に加えて、開催校の御配慮のエキスカーションで見た見事な紅葉に映える藏王山の雄大とこうした調査の名人達の「こぼれ話」を聞く機会を得たことが、私にとっては今年の村研を忘れないものにするであろう。改めて事務局及び大会運営御担当の中央大学・東北大学の会員の皆様にお礼を申し上げます。

#### △ 遠刈田村研印象記

東 敏 雄

とくに蒐集しているわけではない。贈られたり贈つたりして、出

入りの激しかったわが家のこけしのなかで、この遠刈田で求めたひとつが長いこと部屋の片隅にあった。二十と何年か前、ここでバスを降り、退屈するような緩やかな坂道を歩いて、そして藏王に登った。わが家のこけしはその昔を知っているはずである。それとは別に、この近辺に散在する旧いひなびた温泉宿を、なげなしの財布をはたいて訪れたことは何度もある。みんな、かなり遠い以前のことである。遠刈田で開かれる村研大会は、わたくしの心を誘ういろいろなものを持っていた。正確な人数は聞き忘れたが、何年振りといふ盛大な懇親会をみても、そしてあちこちにみられる旧い顔々をみても、なにか共通の想いめいたものをそこから読んでとることができる。

だがそれでも、宿は立派だ。いや立派すぎる。整いすぎていい。道は舗装され、あまりにも山頂へ続きすぎている。宿の中、居酒屋風の、そのいろり。赤いランプの上に組みあげられ人目を欺く檜の丸炭。そしてシヨウとなってしまった民謡。昭和三〇年から四〇年代にかけての激動はここでも例外ではなかった。澄んだ大気、美しい紅葉、そしてなによりも、まるやかな湯の加減。それはいまも変わらない。にもかかわらず、その中にいるこの人工の変りよう。それはittai、われわれ自身にとって何なのであるか。

今年の大会の共通課題は「家」であった。「家」を歴史的ともいおうか、ともかく変化の中で抱えようとするものであった。われわれの住む、この資本主義社会、その形成確立期、ファシズムへの移行期、そして戦後という、それぞれの時期に対応して「家」を把

握し、もって、現在の「農民の家ないし家族」の状況を、その動態の到達点として理解しようという、その辺に焦点がおかれていた。大会を準備する研究通信はそんな風に問題を提示していた。細かなことは抜きにしても、この課題を果すことのいかに難しいことであるのか。近年、大会での報告を聞きながら、自分でも討論に参加しながら、絶えずつきまと印象のひとつはそれであった。今年もまた例外ではない。

われわれの携わっている研究分野の多くは、研究自体の成立の基礎を資本主義社会の生成の中においている。資本主義社会においてこそ、人間と人間の関係を法則的に把握することのできるいわば物的な基礎が形成されるからであろう。何ことでもそうであろうが、一旦、形成された体系が細分化され、専門化されてゆくと、その当初の基本的な関連が希薄化してゆく。空高く舞い上った風は、糸の出どころがもはや見えない。問題が複雑になり、錯綜すれば、解決策はただひとつ、単純な関係に戻してみるだけだ。そもそもその研究それ 자체の成立の根拠に帰つて。そんな想いが脳裏をかすめる。以前は、よくノートを充実にとつたものである。近ごろはノート代りにテープ・レコーダーを利用する。書くという労働を省いて、報告者の思考と聞き手の思考のスピードをあわせてみようというさやかな試みもある。逆に、余分なことを考えてしまえばあいもある。柿崎会員の白川村の報告や、二宮会員の能登本島の報告をききながら、資本主義社会の構造とか類型とか、そういう類の思考が断片的に浮んでは消えた。最高度に発達した資本主義社会において

は、遅れてスタートする諸国は必然的に先進諸国の強い影響をうけた。それは先行諸社会のはあいとは異質である。いわば、資本主義社会として均質化を強要されてゆくのである。しかも、それぞれ先行社会から引継いだ独自の歴史的遺産を背負いながら。現実はその混合である。混合の論理と方法は、その構築は報告されている具体的な事実とどのような相互作用をもつのか…。そんな想いが駆けめぐる。

何ごとでもそうであろうが、ともかく一旦成立して、よかれ悪し  
かれ循環性を確保すると、その根本が変化するのは大変である。一  
国の経済構造とでもなればなおさらである。大野会員の報告や、布  
施会員の報告、そして益田会員の報告を聞きながら、時折りそんな  
ことを考えていた。……昭和三〇年代以降の変化。それは日本の經  
済構造の根本をどんな風にかえたのか。それは、日本資本主義のあ  
たらしい類型の形成なのか。類型とか構造とかいわれるものの「変  
る」論理、転換の論理を、絶えず問題意識の中に持ちたいものだ。  
そんなことを考えながら、どの報告も極めて興味深く聴いた。「そ  
れにしても家の問題もほんに難しいものだ」…。まあ、細かなこ  
とはよしにしておこう。「大会印象記」なのだから。

以前、鳴子の農民の家で大会を持った折、私は受付けやら案内や  
ら雑用係の一人として走り回っていた。会場の大広間のその奥に板  
張りの風呂があつて、そこで湯を浴びて酒を飲んだ。報告がはじまっ  
て了つて、湯上がり姿で広間を通らねばならず、これにはいささか  
閉口した。それにしても、どの部屋に行つても酒があり、車座があ

り、議論があった。今年の大会にもそれがあった（と思う）。村研  
の伝統は生きている。元気な竹内会員。鳴子と速刈田が重なり合う。  
建物も立派になった、なりすぎた、道もそうだ。だが酒があり、車  
座があり、議論がある限り、「高度経済成長」も村研を変えること  
はできはしない。こんな素晴らしい大会を設営して下さった東北大學  
の皆さんには、心から感謝をせねばなるまい。

### 会費改正と会員権停止について

一九七五年度より、会費年額二、〇〇〇円への改定が総会に提出  
され了承されました。物価高のおり心苦しいのですが、印刷費、郵  
送費の値上がりが学会会計を苦しめている事情を考慮して御協力いた  
だきたいと存じます。

なお、経費節約のため、今後四年以上の未納者は会員権を停止し、  
ニュース等の発送を取り止めさせていただくことに決りました。心  
苦しいことですですが御了承いただきたく思います。従って、四六年度  
までの会費の未納者は会費の納入がない限り、今回限りでニュース  
の発送を停止させていただきたいと思います。各年度別の会費と会  
員の未納額は別紙でお知らせします。会計年度は九月末日までとな  
っております。

会費は従来通り振替で東京 802227 村落社会研究会あてでお送  
り下さい。

## 編集委員会から

### △年報第十一集の原稿募集について

去る十月の研究大会総会の席でお伝えしましたが、当日ご出席されなかつた会員の方もおられますので、少々遅くなりましたが、あらためて年報第十一集の原稿を募集します。応募される方は、「論文題目」(仮題にても可)「同要旨」を添えて一月二〇日までに申し出で下さい。

○送り先

〒165 東京都中野区若宮二一五六一十二一七  
柿崎京一

尙、執筆要領につきましては追てご通知しますが、原稿枚数八〇枚(四百字)、図表は二〇枚以内、原稿〆切四月十日です。

### △年報第十集の刊行について

お知らせが遅くなりましたが、「村落社会研究・第一〇集」は去る十月に刊行されました。本書の構成は概要つきの通りです。

(論文)

- 一、現段階日本資本主義における小農民経営と村落 東敏雄
- 一、戦前日本資本主義の農村把握のしくみについて 岩本由輝
- 一、鹿島開発におけるヘ都市と農村 安原茂・吉沢四郎
- 一、部落財政と部落結合 一五年の変化 高橋明善
- 一、第二〇・二一回大会共同討議の論点をめぐって 島田隆

### (研究動向)

#### 一、経済学における研究動向

高山隆三  
村長利根朗

#### 一、社会学における村落研究の動向

余田博通  
須藤健一

#### (その他)

#### 一、「村落社会研究」総目次(壇書房版・第一~九集)

一、編集後記(総頁数三二〇頁、定価四、一〇〇円)

つぎに、壇書房版年報及び研究叢書の既刊分について、まだ買いたくこの機会に手続きをとられますようお願いします。既に年報第一集及び叢書一集は品切れです。さらに一〇集まで揃いますとこれまで以上に早い期間に品切れとなるおそれもありますので念のために申しそえます。ご注文は直接壇書房に申し込んで下さい。

村落社会研究	第一集	第二集	第三集	品切	定価	会員定価 (円含む)
					一、五〇〇円	一、(二五〇円)
					一、六〇〇円	一、(三五〇円)
					一、四〇〇円	一、(二〇〇円)
					二、四〇〇円	二、(二〇〇円)
					二、〇〇〇円	二、(一〇〇円)
					一、七〇〇円	一、(七〇〇円)
					二、〇〇〇円	二、(七〇〇円)
					三、二〇〇円	三、(七〇〇円)
					一〇〇円	一〇〇円
					三、五〇〇円	三、(七〇〇円)

## 近世漁村共同体の変遷過程

品切

西南九州の末子相続	二、〇〇〇円	一、七〇〇円
近世農業村落の成立と展開	二、九〇〇円	二、五〇〇円

## △ 村研年報刊行元の変更と版権の寄贈について

村研年報は塙書房の御尽力で刊行を継続してきましたが、第一〇集の刊行を終えたところで一区切りにしたいという塙書房からの申出があり、第一一集からは出版元をかえて刊行されることになりました。新しく引受けた頂く出版元については編集委員会で御尽力いただき見通しは明るいものと思われます。新しい企画のもとに編集すべく構想がねられていますが、御意見をお寄せ下さるようお願いします。なお、年報第一一集は新しい出版社より発行される第一年度ですので、執筆御希望の方は、期日を厳守して編集委員会や出版社の事務を円滑にしていただくようお願いします。

年報発刊の区切りである時期にあたり、かつて年報の発刊に御尽力いただいた時潮社大内義明氏からは同社発行の年報の全版権の御寄贈を、塙書房白石祐彦氏からは、同社発行の年報で品切れになつてゆくものから順次版権を御寄贈いただきました。両書房ならびに大内義明氏、白石祐彦氏の両氏のこれまでの年報発刊への御協力と今回の版権寄贈に対して心から御礼申し上げたいと思います。

## 役員選出方法の改正と新規役員について

大会時に開催された運営委員、編集委員、宿題委員の合同委員会で、従来推薦制であった役員の選挙選出制への改正が提案されました。その結果、幹事会をおくこととし、定数は二〇名とするが、うち一四名を総会で選挙選出し、残り六名を選出された幹事によって地域を考慮して推薦すること、編集委員、宿題委員については幹事会で推薦することが決定されました。大会時に決定された幹事、編集委員と、一二月七日中央大学で開催された幹事会で推薦された宿題委員の氏名は次の通りです。（アイウエオ順）

幹事（二〇名）

安孫子謙、柿崎京一、川本彰、少池基之、後藤和夫、島崎稔、田原音和、高橋明善、高山隆三、竹内利美、内藤亮爾、中野卓、蓮見音彦、原宏、東敏雄、布施鉄治、細谷昂、松本通晴、安原茂、

余田博通。

編集委員（六名）

柿崎京一（長）、小池基之、島田隆、中野卓、福武直、安原茂、宿題委員（一一名）

安孫子謙、岩本由輝、川本彰、後藤和夫、白井宏明、多々良翼、高山隆三、似田貞香門、東敏雄、松本通晴、安原茂。

## 次年度第二三回大会について

五〇年度大会は、二宮哲雄氏の勤務される金沢大学でお引受けいただくことになり、はじめて北陸の地で開催されることになります。五〇年一〇月八、九の両日、加賀温泉郷での開催が予定されています。大会期日が例年より早めになりますので、研究報告を希望される方はそのつもりで御準備下さい。

## 国際農村社会学会について

農村社会学に関する国際会議が一九六四年以来三回開かれ、第四回会議が一九七六年八月ボーランで開かれます。この会議にむかって、国際農村社会学会(The International Rural Sociology Association)を設立しようとする準備がおこなわれてゐます。日本社会学会は、農村社会学の研究者たちの紹介がある、蓮見音彥氏の御尽力で村研全員の氏名が報告され、その結果、各会員のところに加入への勧誘文と申込書が届いていると思します。加入申込みにあたっては、Name, Position(Specify title and Department), Mailing address, トシア地域の Council Member の指名(該当者の住所・氏名)を記入して申込むことになります。会費は当面年間一千円です。申込先は次のとおりです。

Professor Glenn V. Fuglitt

240 Agriculture Hall

University of Wisconsin  
Madison, Wisconsin 53706

手遅いかから勧誘文申込書が到着していないかたは近くの会員が事務局までお尋ね下さい。なお、この学会に村研が会として加入するかどうかという問題もやがて生じてくると思います。御意見をお寄せ下さい。

## 新入会員のおしえ

長尾 正文	佐々木 豊	服部 民夫	長谷川 宏
東京農業大学 大学院	第一清風荘 8号室 東京都調布市国領町 三一一四一三	東京農業大学 第一清風荘 8号室 東京都世田谷区桜ヶ丘 一の二の一	農業技術研究所 東京都北区西ヶ原 一三一四〇五
東京農業大学 農村社会学研究室	東京農業大学 農村社会学研究室 国分寺市西町四丁目一 けやき台団地二七一〇三	アジア経済 研究所	

# 一九七四年度村落社会研究会決算報告

(一九七三・一〇・一～一九七四・九・三〇)

## 収入の部

前年度繰越金

一四三、七七二円

会費収入(四九年度以前も含む)

一八八、六〇〇

雑収入

三、七七五

計

四三六、一四七

## 支出の部

「研究通信」(九〇・九四号)・名簿印刷費

一五七、三二〇円

その他印刷費

六、五八〇

「研究通信」発送費

六四、五三〇

通信連絡費

一五、〇〇五

会議・会合費

一〇、九九六

事務用品・消耗品費

二二、一一〇

謝金

二五、五〇〇

交通費

三、五五〇

差引残高(次年度繰越)

一八、一〇〇

三二二、六九一

一一三、四五六

渕野雄二郎

東京農工大学  
農学部

府中市幸町三一五  
東京農工大学

水野朝栄

東洋大学  
社会学部

足立区東綾瀬  
一一二八一五

渡辺正

京都大学東南ア  
ジア研究センター

京都市左京区田中  
橋ノ口町一七

北村寧

東北大学大学院

仙台市原町小田原高  
七〇一一六

鹿子木月子

長野大学  
助手

長野県南佐久郡臼田町  
勝馬五〇

## 〔新事務局から〕

鹿子木月子氏の住所をご存知の方はお知らせ下さい。

昭和五〇年度事務局は、東京農工大学高橋明善が引き受けることになりました。一般教育所属で他に人手がありませんので会員の皆様の御協力を願いします。皆様から御意見をお寄せいただければなによりの精神的支援です。事務処理に不慣れなため、御迷惑をかけすることも多いと思いますが、よろしく御指導下さい。